

趣旨説明——「近代／戦後」を紡ぎなおすために

菊 地 暁

（京都大学人文科学研究所）

共同研究の批評はいかにして可能なのか。どのような指標や手続きが有効なのか。このようなナイーブに過ぎる疑問をあえて提示するのは、誤解を恐れずにいえば、共同研究をめぐる「悪口」は相応に耳に挟むにもかかわらず、それらが公に問われることは思いのほか少なく、結果として、共同研究を批評・評価するという実践がいつまでたっても蓄積されないという事態に陥っているように思えるからだ。もとより、本書評特集でその指標や手続きを提案しようというわけではない。ここで試みたいのは、批評の素材となる資料を意識的に集めておく、ということである。

レビュー対象たる菊地暁・佐藤守弘編『学校で地域を紡ぐ——『北白川子ども風土記』から——』（小き子社2020）について確認しておこう。本書は、佐藤守弘による「あとがき」（別名「子ども風土記水滸伝」）にある通り、特定の組織や研究プログラムとはほぼ無関係に、このテーマに関心を抱いた者が三々五々と自然発生的に集まって産み出された。テーマとなったのは、京都市立北白川小学校編『北白川子ども風土記』（山口書店1959）——1946年度生まれの「戦後の子」48名が、3年間にわたる課外学習の成果をまとめた「おどろくべき本」（梅棹忠夫）である。近郊農村から住宅街へと変貌する北白川の地を¹⁾、子どもたちはどのようにして描き出したのか、その取り組みを支えた学校教育と地域社会と文化運動のあり方を、民俗学、歴史学、考古学、地質学、学校資料論、視覚文化論、メディア論、アーカイブ論などの研究者、クリエイター、ファシリテーターたちが、それぞれの視角から掘り下げたものである。本書が、北白川のケーススタディとしても、〈子ども風土記〉というジャンルの考察としても、なお不十分な「中間報告」であることは編者自らが承知している。とはいえ、ここで一旦、各方面からの御批判を仰ぎ、今後の課題をクリアにしたいとの願いから、本書の刊行ならびに本特集の企画に至ったわけだ。

本特集の書評者は、2020年6月25日から7月16日に4週連続で開催されたオンライントークイベント『学校で地域を紡ぐ——『北白川子ども風土記』から——』にコメントイ

ターとして御登壇いただいた諸氏に若干名を加えたものである（さらに刊行後に読者から寄せられた情報に基づき佐藤が補足の一文を寄せた²⁾。このような多分野の専門家から御批評をいただけたのは、編者として望外の喜びだ。厳しい御指摘も少なくないが、課題を明確化できたのなら、それは間違いなく一歩前進、今後の糧として有難く頂戴しよう。また、『京都新聞』³⁾、『京都民報』⁴⁾、『図書新聞』⁵⁾、『オズマガジン』⁶⁾、『ことばと社会』⁷⁾の各誌に寄せられた書評にも同様に感謝申し上げる。

さて、本特集を編集している2020年下半期、世界は果てることのない混沌で満ち溢れている。年初に始まった新型コロナ(covid-19)の世界的流行はいまお予断を許さず、直近では大阪市廃止をめぐる住民投票や米国の大統領選が社会の「分断」をこれでもかと露見させ、そして、日本学術会議の任命をめぐる混乱は未だを着地点を見いだせずにいる。まだまだいくらでも挙げられそうだがこれくらいにして先を急ぐと、私たちが直面しているのは端的に「戦後改革」の「失敗」と呼んで良い。達成したつもりでいた「近代」は決して定着しておらず、簡単に私たちの手からこぼれ落ちる程度のものであった。生活綴方／生活記録をはじめとする戦後社会運動の功罪をいま一度ふり返らなければいけない理由はここにある。多様な人々が生身の生活を送る「地域／コミュニティ」がどのように編み上げられ、それをより広い「社会／世界」にどのように結びつけうるのか。そしてその具体的な「いま・ここ」で一人一人ができることは何だろうか。数多の問題をあらためて一から考え直さなければならない状況に、私たちは放り込まれている。「戦後」と同様に。

眼前の膨大な課題にクラクラしそう。だが、避けて通るわけにもゆくまい。

註

- 1) 北白川が今日はもとより1950年代当時においてもマルチ・エスニックな地域だったことは留意しておきたい。『北白川こども風土記』巻末所収「三年間を通して、北白川郷土の研究に協力してくれた六年生のお友だち」には、中国系、朝鮮系の名前が散見されるほか、「シリアヌマラスヤテム」の名前を見出せる。彼女は、戦中にインドネシアから京大に来た南方特別留學生が、戦後の政情不安で帰国できなくなり、京都で結婚したことによって生まれた子供である。
- 2) コメンテーターの一人である須永哲思氏には近刊の『日本教育史往来』に書評をお寄せいただく予定である。なお、イベント動画は引き続き「小さ子社」のチャンネルで視聴可能である(<https://www.chiisago.jp/kkf/>)。
- 3) 金田章裕「書評：『学校で地域を紡ぐ』北白川、子どもとの交感」2020年8月16日付『京都新聞』
- 4) 和崎光太郎「書評：『学校で地域を紡ぐ』風呂敷広げる痛快さ」2020年8月30日付『京都民報』
- 5) 石原俊「書評：『学校で地域を紡ぐ』コミュニティ・メディアをめぐる豊かな水脈の地平を指し示す 子どもを主体とする「ボトムアップ型」文化運動の潜勢力」2020年9月19日付『図書新聞』3464号
- 6) 堀部篤史「言葉で旅する、25冊の本 #5 新しい京都旅編 平熱の京都を知るための本」『オズマガジン』2020年10月号
- 7) 安田敏朗2020「近刊短評：地域にかかわる」『ことばと社会』22号